



K A P P A N O V E L S

長編推理小説 書下ろし

すず らん

鈴蘭伝説の殺人

札幌・函館5・5・5の連鎖

ふか や ただ き スリーファイブ

深谷忠記



お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、最近、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえていただませんか。どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(〒112-11)

光文社出版局

長編推理小説 ^{すずらん} 鈴蘭伝説の殺人

1990年1月31日 初版1刷発行

著者 ^{ふか}深 ^や谷 ^{ただ}忠 ^き記

発行者 大坪昌夫

印刷者 佐々木明

東京都文京区後楽2-18-8

公和図書

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替 東京 6 115347 電話 東京 (942) 2 2 4 1 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(関川製本)

表紙の模様・意匠登録 116613 © Tadaki Fukaya 1990

ISBN4-334-02854-3

Printed in Japan

すす らん
鈴蘭伝説の八

—札幌・函館 5・5・5 の連鎖—
スリーファイブ

ふか や ただ き
深谷忠記



カッパ・ノベルス

目次——鈴蘭伝説の殺人すずらん

第一章	五月の小さな鐘——東京・井 い の頭 かしら 公園	5
第二章	君 きみ 影 かげ 草 そう ——札幌・円山 まるやま 公園	43
第三章	谷間の百合 ゆり ——函館 はこだて ・函館公園	74
第四章	妖精の梯子 はしご ——横浜・山下 やました 公園	104
第五章	聖母の涙——札幌・大通 おおどおり 公園	194

本文のイラストレーション

中山隆右なかやまたかすけ

第一章

五月の小さな鐘——東京・井の頭公園

1

東京の武蔵野^{むさしの}にある井の頭公園には、五月の夜の匂いが漂っていた。

葉桜の匂い、新緑を迎えようとしている木々の樹液の匂い、池の水の匂い、暑くも寒くもない空気の匂い……と。

だが、ふだんの仙崎稔^{せんざきみのる}なら、そうした自然の匂いなどを感じることはない。

彼の五官は、今夜は特別だった。これまでの、あまり恵まれているとは言えない三十年の彼の人生のなかで、今夜は最良の日といってもよいかもしれな

い。そのため、今夜の彼は、いつもなら聞こえない音を聞き、いつもなら見えない物を見、いつもなら感じない匂いを嗅いでいるのだった。

仙崎は、田所真寿美^{たどころますみ}と腕を組んで歩きながら、時々彼女の横顔を窺った。

そのたびに、なんて良い女なんだろうと思った。少し茶色に染めた、レイヤーカットした長い髪。

低くなく、といって高すぎもしない形のよい鼻。小さな口と、薄いサングラスの奥の奇麗な瞳。そして、これ以上美しいものがないのではないかと思われるほどなめらかな肌、頬から顎にかけての線。

この女が、近い将来、自分のものになるのである。自分の妻になるのだった。

そう考えると、仙崎は心が浮きたつような喜びの一方で、時として強い不安感に襲われた。ひょっとしたら、これは現実ではなく、夢を見ているのではないか。いまに夢が覚め、恋人もいない元の自分に戻るのではないか。そういう恐怖があるのだった。

仙崎は、小金井市にある小さな工作機メーカーの

工員にすぎない。学歴も、山梨^{やまなし}の工業高校を卒業しただけである。財産もなければ、特に美男子というわけでもなかった。わずか半年前までは、三十を過ぎ、自分はこのまま結婚できないのではないかと悩んでいたのだった。

ところが、そんなところへ田所真寿美が現われたのである。まさに、幸運の女神が微笑^{ほほえ}んでくれたとしか考えられないようなかたちで。

明日から師走^{しわす}という、去年の十一月三十日のことだ。仙崎は残業をして、九時過ぎに府中市^{ふちゅうし}のアパートへ帰ってきた。すると、一人の女が玄関から三十メートルと離れていない路上にうずくまっていた。もし相手が男か、中年以上の女だったら、寄って行って声をかけるだけの親切心は、彼にはない。空腹だったし、知らん顔をしてアパートへ入ってしまっただろう。が、顔の細部までは分からないものの、若い女のような。そこで、近寄り、

「どうしたんですか？」

と声をかけると、女はアスファルトの窪^{くぼ}みにハイ

ヒールの踵^{かかと}を取られ、足首を挫^{くじ}いていたのだった。仰向けられた女の顔を見て、彼は一瞬どこかで会ったような気がした。しかし、どこで会ったのか、思い出せない。もしかしたら、彼の錯覚かもしれないし、近くの店か駅でも一、二度顔を合わせ、それが記憶の底に残っていただけなのかもしれない。とにかく、彼は女に肩を貸し、表通りまで連れて行き、タクシーを拾ってやった。

病院へ行くかと訊いたのだが、女がタクシーに乗って家へ帰れば、自分で手当てできると言ったからだ。

女は世田谷区^{せたがや}豪徳寺^{ごうとくじ}に住む田所真寿美と名乗り、いずれあらためて礼に伺うから、と彼の名とアパートを訊いた。

それから、彼女がアパートを訪ねてくるまでの一週間は、仙崎にはひどく長い時間に感じられた。あは言ったものの彼女は来ないのではないかと、というおそれが気持ちの半分以上を占めていた。それ以来ながら、彼は毎日できるかぎり残業を早く切り上

げ、アパートへ飛んで帰った。

翌週の水曜日の夜、言葉どおり、真寿美はケーキを持って訪ねてきた。

仙崎は嬉しかったものの、少し残念な気もした。

彼女が来るかもしれないという楽しみが、これで消えてしまうからだ。

それで、彼女が帰るとき、思いきって、またいつか会ってもらえないかと言うと——たぶん断わられるだろうと思っていたのに——意外にも、彼女が嬉しそうに「はい」と答えたのだった。

ところで、この二度目の出会いのときも、仙崎はまた、以前どこかで彼女に会ったような気がした。

そこで、今度はそう言ってみると、

「仙崎さんも？　実は、私もそんなふうに思っていたんです」

と、彼女が笑みを浮かべて言った。

「いつ、どこでお会いしたんですかね」

「よく考えてみたんですけど……以前、私はこのあたりに住んでいましたし、今もお友達がいるのでよ

く来るんです。ですから、何度か道で擦れ違ったりしてお目にかかっているんじゃないでしょうか」

「なるほど」

応えたものの、彼はどうも違うような気がした。といって、ではどこで会ったのかと考えても、一向に思い出せない。

それで、この件はそれきりになった。

人間の記憶というのは不思議なもので、真寿美と二度、三度と会ううちに、その後の彼女のイメージが強く彼の記憶に刻印され、以前どこかで会ったような印象はほとんど消えてしまった。

それはともかく、真寿美との交際が始まって、仙崎は、喜びの一方で不安の連続だった。

不安の原因は、彼女が魅力的な女性だからだが、それだけではない。多分に、彼女の秘密主義にあった。

真寿美は、実家は広島で病院を経営していると話した。父親と兄が医師なのだという。そして、彼女自身は去年の春、女子大の英文科を卒業し、二年制

のセクレタリースクールへ通っていた。いや、彼女がそう言うだけで、本当のことは分からなかった。住所も、豪徳寺のマンションに住んでいるというだけで、場所や電話番号を教えなかった。ある事情から、電話番号は電話帳に載せていないが、いずれ必ず教えるからと言い、会うときは一方的に連絡がくるのである。

妙だった。

というより不可解だった。

住所を教えないのは、もちろん彼を警戒してのことだろうが、それならどうして自分と付き合う必要があるのか、と彼は思った。どう考えても、彼女が自分と付き合うメリットがありそうには思えない。最近男のほう結婚難のため、女の結婚詐欺師がけっこういるらしい。しかし、それなら、ちょっと調べれば、彼に騙し取れるほどの金が無いのは明らかであろう。

では、適当に彼をからかって楽しんでいるのかというと、彼女には、そんな様子はまるで感じられな

い。

このように、真寿美の真意が分からず、彼は不安であり、また不満でもあった。

が、何も訊かず、彼女との交際をつづけてきた。もし無理に彼女の事情、理由を問い質したりしたら、それを境に、彼女は自分の前から消えてしまうのではないかと、とおそれたのである。

それを考えれば、彼女の思惑など二の次だった。彼女に会えるだけで、心がおどった。月に二度か三度、彼女と会って映画を見たり、お茶を飲んだりして短い時間を過ごす。それだけである。手さえ握るわけでない。女などセックスの道具だと考えていたかつての自分を思うと、彼自身、信じられないくらい清い交際だった。

もちろん、彼女に会えるだけで嬉しいとはいっても、それがいつ突然断ち切られるか分らない、という不安は、たえず彼を苦しめつづけた。彼女が連絡してこなくなれば、彼には彼女を捜す手段が無い。だから、せめて正確な住所と電話番号だけでも知っ



ておきたい、と思う。それでいて、彼女にそれを質せば、それが最後の時になってしまふかもしれない、という危惧、ジレンマが付きまといっていた。

しかし、その苦しみも、いよいよ今夜で終わりになったのである。

さっき、渋谷のレストランに入り、料理を注文すると、真寿美は自分のマンションの住所と電話番号を書いたメモをそっと彼のほうへ滑らせ、

「いままで、本当にごめんなさい。住所を教えられなかったのは、決してあなたを信用していなかったわけじゃないの。まったく私のほうだけの、ある事情があったの。それはいずれお話しするわ」

そう言い、更に、近いうちに両親に会って欲しい、と付け加えたのだ。

「もし……もし、あなたが良かったら、私をあなたのお嫁さんにして欲しいの。父は、私の言うことなら何でも聞いてくれるし、ただ会ってくださればいいの。結婚も、私が好きになった人なら、学歴や職業は関係ないっていつも言っているから」

仙崎は真寿美と腕を組んで歩きながら、彼女の言葉は何度も何度も頭の中で反芻した。そうしては、彼女の顔を窺い、夢でないことを確かめた。

時刻は十時を回ったところである。

池の南側に付いている木立ちの中の遊歩道には、まだけっこう散歩している人がいた。

彼らのように若いカップルだけでなく、中年男が若い女を連れているのや、学生風の男女のグループと擦れ違った。

時々、真寿美が、彼と組んでいないほうの手に持った花の先を自分の顔に近づけ、それから彼に微笑みかけた。

彼女が欲しいと言ったので、彼が渋谷のフラワーストックで買ってやった三本のスズランだった。

真寿美がスズランを上向けると、その香りは、時として、彼の鼻孔にも届いた。それは、夜の匂いのように、受け取り手の心持ちによって左右される曖昧なものではなかった。かすかではあったが、はっきりとした、誰もが感じる甘い、柔らかな芳香だった。

た。

戸を立てた茶店の前まで来たとき、真寿美がまたスズランの花のほうを上に向け、その香りがふっと仙崎の鼻先にも漂った。

と、彼は、ふと何かが意識に引っかかってくるのを覚えた。

「何だろう？」

彼はその実体を見定めようとした。

が、それはすぐに消えてしまい、分からない。

かすかな気掛かり、不安……そんな感じに似た余韻だけが残った。

ただ、それは、真寿美がスズランを買って欲しいと言ったとき、彼の脳裏に甦よみがえった過去のある行為の記憶に無関係ではないようだった。

彼は、自分のその行為を思い浮かべた。

もう、ほとんど思い出すことさえなかった出来事だ。

真寿美には明かせないが、すでに彼の心に何の拘こたわりも残していない。というより、一度だって、そ

のために彼は罪の意識を感じたり、苦しんだりしたことはなかった。直後こそ、もし警察に捕まったら……という恐怖が多少あったものの、それもじきに薄れ、消えた。

その出来事は、直接スズランに関係していたわけではない。が、真寿美がフラワーショップの店先に足を止め、

「スズランでかわいいわね。私、スズランが大好きなの」

と言ったとき、スズランという言葉の連想から、彼は、そのとき落とした物と一緒に自分の行為を思い出したのだった。

弁天堂べんてんどうの入口を過ぎた。

池の西側へ廻りながら、仙崎は、

「俺は何を気にしているんだろう」

と、更に自分の胸の内を探さがった。

意識に引っかかったものは、何だったのだろう。

俺は、自分の過去を真寿美に気づかれるのをおそれているのだろうか。それで、彼女が去って行くのを

おそれているのだろうか。

それも無いではない感じだが、どうもそれだけではなかった。

分らない。

彼は考えるのを諦めた。

2

池から離れたところで、このまま左の公園通りへ出て帰らないか、と仙崎は真寿美に言った。

真寿美がうんと言え、すぐにタクシーを拾い、彼女のマンションまで送って行くつもりだった。

だが、真寿美は「ううん」と首を横に振り、「もうちょっと、このままあなたと歩いていたいわ」

と、答えた。

「でも、じきに十時半だから」

「あなたと一緒になら、何時だってかまわないわ。送ってくださるんでしょう？」

「それは、送るつもりだけどね」

ただ送って行くだけではない。彼は今夜、彼女の部屋で、これまで抑えに抑えてきた欲望を満たしたいと考えていた。

これは、彼女が本当に自分のものになったかどうかを確認する行為でもある。

彼女の肉体を抱けば、彼女が自分の妻になるということが夢ではなく、現実だと確認でき、安心できるだろう。

住所を書いたメモをくれたということは、彼女がそれを自分に許したという意味ではないか。

彼はそう解釈していた。

だから、食事を終えてすぐ、渋谷から彼女のマンションへ直行したかったのである。

しかし、彼女が、井の頭公園を散歩したい、と言いだしたのだ。

「まあ、焦ることはない」

仙崎は、胸の内つぶやいた。

どうやら彼女もその気のようにだし、これまで半年

も我慢してきた思いをすれば、いま一時間や二時間遅れたからといって、たいした問題ではない。

「あ、そうだわ」

不意に、真寿美が思い出したように言い、足を止めた。

池の北側から東側に廻り、野鳥の池とボート乗り場を区切っている七井橋ななせいという橋に近づいたときだった。

自然に仙崎も立ち止まり、彼女を見た。

「仙崎さん、この前お会いしたとき、胃の調子が悪いって言ってらしたわね」

「あ、ああ」

「その後、いかがかしら？」

「時々痛むけど、ま、たいしたことはないかな」

「だったらいいんだけど、郷里の兄に電話したら、とても効くという漢方薬を送ってくれたから」

「お兄さんは、東京の医大を出た内科医じゃなかったの？」

「そうよ。でも、自分で漢方の研究もしているの。」

漢方薬のほうが副作用が少ないし、断然効く場合が少なくないんですって」

「じゃ、折角送ってくれたんなら、いただこうかな」

「ぜひ、試してみて。急にこんなお話をしたのは、今、ここにそのお薬を持っているのを思い出したからなの。あなたに飲んでいただくと思って、出がけに煎じせん、小さな瓶びんに詰めてきたの」

「ふーん」

仙崎は感動した。

真寿美は、自分がちょっと胃の調子が悪いと話したのを覚えていただけではない。わざわざ兄に電話して薬を送らせ、しかもそれを煎じて持ってきてくれたのだ。こんな心づかいは、子供の頃に母親から受けた記憶しかなかった。

「もし、いま飲んでくださると、嬉しいんだけど」

「ぜひ飲ませてもらうよ」

「蜂蜜を入れておいたけど、それでも、苦くて飲みにくいかもしれないよ」

「苦いぐらい、平気さ」

「本当？ 嬉しいわ」

真寿美がちょっとはしゃいだような声を出すと、

「それじゃ、ベンチに掛けて、飲んで」

「うん」

仙崎はうなずき、再び歩き出した。

橋の渡り口を過ぎると、ベンチが池の畔ほとりに飛び

飛びに並んでいた。

五月の連休を過ぎたとはいえ、このところ肌寒い日がつづいている。そのため、じっと座っていると冷えるからだろう、二組のアベックが二十メートルほど間を置いて腰をおろし、抱き合い、顔をつき合っているだけだった。

もちろん、彼らは自分たちの抱擁に夢中で、後ろを誰が通ろうと気づかない。いや、たとえ気づいていたとしても、何の関心も示さない。

「ここでもいいかしら」

彼らから三、四十メートル離れたベンチまで来たとき、真寿美が言ったので、仙崎は彼女のために埃

をフツと吹いてやり、先に掛けた。

真寿美も並んで腰をおろす。

「これなの」

スズランを彼とは反対側に置き、バッグから栄養剤の小瓶を取り出して見せた。

どこにでも売っている「プロビタンE」の百五十ミリリットル瓶だった。

「わざわざ俺のために煎じて、瓶に詰めてきてくれたんだね」

彼は言った。

「そう。もし効くようだったら、私、毎日でも煎じてあなたのお部屋まで持ってってあげる」

「ありがとう」

「ううん、それぐらい、あなたのためなら何でもないわ」

彼女は言うのと、瓶を二、三度振ってからハンカチで蓋ふたから底までよく拭き、「はい」と渡してよこした。

彼はそれを受け取り、ネジになった蓋を開けた。

プンと煎じ薬独特の匂いがした。

「兄によると、吐き出してしまわないように、舌が味を感じる前に一気に飲んでしまったほうがいい、という話だったわ」

彼女が言った。

「うん」

彼は答えると、瓶を口に持ってゆき、首を反らしてごくごく喉を鳴らして飲んだ。

「どうお？」

彼が飲み終わるのを待って、彼女が訊いた。

「きみが蜂蜜を入れておいてくれたせいかな、それほど飲みづらくなかったよ」

彼は言った。

「そう、よかったわ」

「じゃ、行こうか」

「いや」

彼女が首を横に振った。

「いや？」

「ここで、私も……抱いて」

彼女が言葉の途中で一拍の間をおき、ちらっと二組のアベックがいる右手のベンチのほうへ目をやってから、言った。

「……」

突然だったので、彼のほうが一瞬戸惑った。

「こんなところじゃ、いや？」

「そんなことはない」

彼は慌てて言った。

「だったら、お願い」

「ああ」

彼はうなずくと、薬の小瓶を足下に転がし、彼女の肩に腕を回した。

抱き寄せると、彼女の上体がしなだれかかってきた。

彼は彼女の顔に自分の顔を近づけ、唇を吸った。

彼女は初め、彼の舌が押し入れられるのをちょっと拒んだが、やがて唇を開きそれを迎え入れた。

そうして、互いに舌を絡ませ、吸い合い、どれぐらいした頃だろうか、彼は頭が痛くなり、心臓がド